

東洋文化研究所

|    |       |       |         |
|----|-------|-------|---------|
| I  | 研究水準  | ..... | 研究 18-2 |
| II | 質の向上度 | ..... | 研究 18-3 |

## I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 1. 研究活動の状況

#### 期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、当該研究所はその活動の重点を研究の体系化と継続、萌芽的・先端的研究、研究成果の社会への還元、及び国際交流の拡大に置いており、それらの活動は社会の期待するところである。平成19年度の教員一人当たりの論文・著書の発表数は4.8件であり、その質においては、評価できるものを公開している。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の採択数が32件、その採択金額は1億1,137万円であり、その他の寄付金を合わせた外部資金総額の対運営費に占める比率は高い。この外部資金を積極的に活用し、国内外の研究組織・研究者との交流、共同研究体制を作り、アジアにおける研究者ネットワークのハブとしての役割を十分に果たしている。現在継続しているデータベース化は、当該研究所の人的・物的機能を発揮するものであることは、優れた成果である。

以上の点について、東洋文化研究所の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、東洋文化研究所が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

### 2. 研究成果の状況

#### 期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、歴史、美術、文化人類学、及び宗教思想等の領域において先端的な研究成果を発表している。卓越した研究成果としては、例えば、預言者ムハンマド一族を対象とした系譜文献をはじめ用いた社会史研究が挙げられる。国内外で高い評価を受け、イラン政府が創設した国際ファーラービー賞の第一回授賞対象となった。社会、経済、文化面では、卓越した研究成果として、例えば、イスラーム世界の創出を正面から問い直した挑戦的な研究が挙げられ、新たな世界史認識の再構築を促す画期的な書として、高い評価を受けている。また、日本の重要外交文書を中心としたデータベース「世界と日本」は国内外から200万を超えるアクセスがあり、情報の公開、社会への還元といった研究所の活動の一端を示すもので、他に類のない卓越した業績といえる。

過去4年間の研究成果に対して、国内外の学術賞受賞は上述したものを含めて9件（11賞）にのぼる。これらの状況などは、優れた成果である。

以上の点について、東洋文化研究所の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、東洋文化研究所が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

## II 質の向上度

### 1. 質の向上度

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

当該組織から示された事例は3件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」と判断された。